

令和2年度みやぎ県民大学講座 「宮城と戦争の歴史を振り返る」

メディアから読み取る宮城と戦争
～日清戦争を中心として～

宮城県図書館資料奉仕部 根岸一成



本講座の流れ

- 1 日清戦争を概観する
- 2 日清戦争と宮城
- 3 〈軍事都市・仙台〉というメディア
- 4 地方ジャーナリズムの成立
- 5 おわりに—日清戦争と日本近代文学

国立国会図書館デジタルコレクション 日清戦争錦絵



2

1 日清戦争を概観する
～初の対外戦争にいたる経緯



日本初の対外戦争 ～東アジアの情勢と日清戦争にいたる経緯

- 明治8年（1875）**江華島事件**：日本軍艦が江華島沖で行った示威行為による砲撃。
明治9年（1876）**日朝修好条規**：朝鮮国は自主の邦を宣言。清の宗主権を排すも清は認めず。
- 明治12年（1879）**琉球処分**：清は宗主権を主張したが、日本は琉球藩を廢止し沖縄県を設置。
- 明治15年（1882）**壬午事変**：日本との開化を進めようとする国王高宗の外戚閔氏一族に反対する勢力が国王の父・大院君のもとに結集し反乱。民衆が日本大使館を包囲した。
- 明治18年（1885）**天津条約**：伊藤博文が天津に渡り清国全権李鴻章との間で締結。両国の朝鮮からの撤兵と、今後の出兵の際は通告し合うことが確認される。
- 明治27年（1894）**甲午農民戦争**：東学党の信徒を中心とした朝鮮政府への大規模な反乱。清は朝鮮の要請を受けて出兵。日本も天津条約にしたがい出兵。日清両国は朝鮮の内政改革をめぐり対立。
- 明治27年（1894）8月1日 日本は豊島沖海戦を契機として**日清が開戦**。追って**清国に宣戦を布告**。

4

日清戦争とは何だったのか

「宣戦の詔書」(国立公文書館蔵)



5

英雄軍人の誕生 ～原田重吉陸軍歩兵一等兵～

清国という“他者”⇒《日本人》という同胞感の芽生え

平壌の戦いにおいて玄武門を先駆けて開門した功績により「金鶴勲章」を授与され一躍有名になった英雄軍人。

⇒日清戦争は結果として、“**富国強兵の物語**”と、武勲による**“立身出世の物語”**の、二つの物語を具体的に実現した

→《日本人》という国民意識の形成

<https://asia.si.edu/object/S2003.8.2762a-c/>
The Smithsonian Institution



7

日清戦争～国外の戦況（開戦から終戦まで約9ヶ月）～

①明治27年7月 豊島沖海戦（日清戦争開始）

7月 成歎の戦い～牙山の戦い

8月 宣戦の詔書発布

②明治27年9月 平壌の戦い～黄海海戦

③明治27年11月 大連占領～旅順占領

④明治28年2月 威海衛占領（北洋艦隊降伏）

4月 下関条約締結・講和

～三国干渉・遼東半島返還

⑤明治28年5月 日本の台湾統治

～台湾総督府設置



6

日清戦争開戦に対する反応～福澤諭吉の主戦論～

「日清戦争は文野の戦争なり」『時事新報』社説 明治27年7月29日



○朝鮮海豊島の附近に於いて日清両国との間に海戦を開き、我が軍、大勝利を得たるは、

昨日の号外を以て読者に報道したる所なり。（中略）

○さて日清間の戦争は世界の表面に開かれたり。文明世界の公衆は果して如何に見る

可きや。戦争の事実は日清両国との間に起りたりと雖も、其根源を尋ねれば、文明開化

の進歩を謀るものと其進歩を妨げんとするものとの戦にして決して両国間の争いに非ず。（中略）

○日本人の眼中には、支那人なく支那国なし、ただ世界文明の進歩を目的として、其目的に反対してこれを妨ぐるものを打ち倒したるまでのことは、人と人、国と国との事に非ずして、一種の宗教争いを見る可なり。苟も文明世界の人々は、事の理非曲直を云わずして、一も二もなく我目的の所在に同意を表現せんこと、我輩の決して疑わざる所なり。（後略）

8

2 日清戦争と宮城



（宮城県図書館蔵）

日清開戦前後の動向② ～細谷十太夫の従軍・軍夫千人長～

細谷十太夫について 1845年（弘化2）～1907年（明治40） 元仙台藩士

諱は直英。武一郎とも称した。鴉仙（あせん）と号した。

1868年の戊辰戦争の際、仙台藩の大番士であった十太夫は密偵として二本松にいたが5月1日の白河城攻防戦の敗戦を聞き官軍と戦うため須賀川で民兵を募集、博徒、侠客等五七人が集まつた。（中略）十太夫はその後も陸軍少尉として西南戦争に従軍、また県官吏、牡鹿郡大街道開拓場長として士族授産事業にかかわり、さらに日清戦争にも軍夫千人長として参加するなど多方面に活躍した。晩年は仏門に入りかねて敬愛していた林子平の墓所・ご龍雲院の住職となつた。墓は、（龍雲寺）本堂西側にある、この座像はその十太夫の姿である「細谷地蔵」といふ。（龍雲寺「細谷地蔵」解説文より引用）

『東北新聞』明治27年8月3日の雑報記事より

細谷直英氏 大街道興産会場に在り余ろに天下の大勢を観て為すあらんと時機を俟ちたる同氏は這般朝鮮事件に付大に奮起し屍を埋むるの地こそ出てたれと蹶起して来仙し目下東二番丁四十二番地寺澤方に遇し伊達家出願の従軍の先鋒たらんと意気込居る由なり。



日清開戦前後の動向① ～宮城の義勇兵運動など民衆のナショナリズム～

全国的な義勇兵運動：日清戦争開戦前、民衆による自発的な戦争参加協力のうねり

○仙台義勇同盟（関震六：元仙台藩士。西南戦争に警視庁隊の一員で出征した経験を持つ）

○仙台義団（細谷十太夫：元仙台藩士。戊辰戦争では衝撃隊を組織し活躍した）

→のち政府は非正規組織の従軍を認めない通達

「東北新聞」明治27年7月7日掲載記事「義勇団体異聞」

「関只野両氏の発起にかかる同団体は日々二三十名の応募申込みありて昨今殆んど五百余名に及びたり今其異聞を記せば、大立目重成氏外五十余名及刻士藤田武次郎氏並に同門弟五十名の諸氏らは去る五日何れも同団体へ加盟し金若干円を寄付されたり ○登米郡登米能勢三九郎氏は同村義勇者総代として一昨五日同団体事務所に出頭し百余名の加盟を申込みたり ○刈田郡白石町白井清之助氏は同地同盟者名簿提帶昨日来仙本日神宮協会所に於ける協議会に臨まるる筈なり」

「東北新聞」（宮城県図書館蔵）



日清開戦前後の動向③ ～宮城県での「軍夫」「軍馬」の募集～

①第二師団軍用夫募集 『東北新聞』明治27年7月31日記事

第二師団にては軍用夫千人名募集方の儀を市役所へ依頼これを以て市長は速時各区長其他の有志家へ右の趣きを照会されしに希望者頗る多く昨日までの所武田某氏言一手の募集に応じたるもののみにても已に七百余名に達したる由にて応募者総員は募集定員より数百名を越したりと云うへり。尚右の人夫は今より之を徴用するものにあらずして第二師団が毎々出軍する場合に使役する予備人夫なりといふ。

②宮城郡の軍夫募集について 『東北新聞』明治27年8月3日雑報記事

同郡衙にては軍用夫五百名募集せしに応募者七百名に達し為國家とあらば無償にてもと願出づる者あり又以て敵愾人気の旺盛なるを見るべし

③原町に於ける軍馬 『東北新聞』明治27年8月3日雑報記事

宮城郡原町地方附近にて五百頭の軍馬を徴集中なりと聞く

日清開戦前後の動向④～仙台市兵事義会の設立と国民の誕生～

仙台市兵事義会：仙台市で立ち上がった軍人及びその家族への後援組織。明治27年7月設立。

初代会長：仙台市長・遠藤庸治 幹事には市助役のほか政界・財界・教育界から。事務所は仙台市役所内に設置

- 目的 ①第二師団の出征に際し便宜を図る事 ②従軍者の家族を保護する事
③戦死者の遺族を保護し負傷者を慰藉する事 ④軍功者を顕彰する事

宮城県知事・勝間田稔 明治27年7月31日五城館演説（「奥羽日日新聞」明治27年8月2日）

本日は兵事義会の創立に付き有志者の会合あるを伝聞しましたゆえ推参したる次第であります。

兵事義会の国家に大なる関係を保ち居るは私の喋々を要しません。兵事義会の成り立ちは諸君の兵事に御熱心なるを証するものにて仙台市の為めに賀すのみならず、實に日本帝国の為に賀すべき事であります。我帝国と清國との関係は如何なる形勢になり居りますか。諸君は定めて新聞紙上に於て御承知のことと思はれます。支那軍艦が我軍艦に向つて発砲せしより我軍艦之れに応戦して大勝利を得たるは諸君と共に賀せざるべからざる次第である。



13

日清開戦前後の動向⑥ ～仙台市兵事義会の再興・日露戦争～

仙台市兵事義会の再興（日露戦争前夜）

明治37年1月12日 仙台市長早川智寛と、宮城県内務部長平岡定太郎の呼びかけによる

旨意書：東洋の形勢日に急を告げ何時動員出征命あるやも計りがたく此際兵事義会を再興し

出征軍隊の便宜を謀り且出征従軍者の家族を保護し以て帝国軍隊をして後顧の憂

ながらしむる等大に臣民たるの本分尽さるべからず

平岡 定太郎： 農家の次男として兵庫県に生まれる（のちの平岡公威の祖父）

帝国大学卒業後、内務省入省後広島県書記官など経て、明治33年宮城県書記官から県内務部長へ、明治39年原敬の後ろ盾により福島県知事、41年樺太庁長官となる。しかし、長官時代に公金流用疑惑に巻き込まれ辞意を表明。



15

日清開戦前後の動向⑤ ～仙台市兵事義会の設立と県民運動～

仙台市兵事義会 義捐金及び刀剣寄附廣告

仙台市兵事義会寄附人名掲載記事

義捐金募集廣告
本會ニ於テ
刀劍一本
成ルベク
脇相ノ
長キモ
ナシヲア
クノア
君玉急
師附ノ
アフニ
詔フ
明治二十七年九月
期治二十七年九月
仙臺市兵事義會

明治27年9月「奥羽日日新聞」掲載 (宮城県図書館蔵)

14

日清開戦前後の動向⑦ ~宮城郡尚武会の創設へ~

宮城県尚武会の創設準備へ「東北新聞」明治27年8月1日記事

「同会は先に郡市長会あり各郡市長參集を機とし一市十六郡長及び仙台大隊区司令官小郷武氏等片平町なる事由に会し種々協議を仄くしたる結果現役軍人を優遇目つ予備後備の諸士を慰しさをは徵發に応ずべき壮丁をして軍人思想を涵養せしめ国民尚武の士氣を奮起し以て元氣の充実を期せん（後略）」

宮城郡尚武会発会式へ 「東北新聞」明治27年10月11日記事

「予記の如く昨日を以て挙行されたり、会場は原町小学校にて門前には縁門を作り紅燈を吊し国旗を掲ぐる等装飾頗る偉麗、式場は講堂後に幕張なしで設て上壇には大臣陛下の御真影を奉安し体裁頗る完備せり而て正午十二時第一点鐘にて会員一同着席、第二点鐘にて樂人等着席、第三点鐘にて山口少将及び各連隊長仙台出身将校、床次參事官其他來賓一同着席するや会長大童信太夫氏は発会式挙行の趣旨を演説す（此間小学生徒の君ヶ代の唱歌）次は勅語奉誦（一同最敬礼）（奏楽）（後略）」

16

3 「軍事都市」というメディア ～軍都・仙台の歩み～



軍都・仙台の歩み① ～城下町・仙台から軍都・仙台へ～

明治4年 仙台に東北鎮台設置（廃藩置県後、四鎮台に）本營は仙台城二の丸に設けられる。

明治6年 東北鎮台は仙台鎮台に改組。（全国六鎮台に編成）

宮城野原練兵場付近・榴ヶ岡に兵舎を新築する。歩兵第四連隊の兵舎となる。

この年 徵兵令により、東北からの徴兵された者は

仙台鎮台へ入営。

明治21年 仙台鎮台は第二師団に編成。仙台城跡及び
川内地区には第二師団司令部の他、

砲兵隊、騎兵隊、工兵隊、輜重隊、歩兵隊

練兵場や射的場などが配置される。

[城跡軍施設を中心に「軍都」にふさわしい体を備える](#)



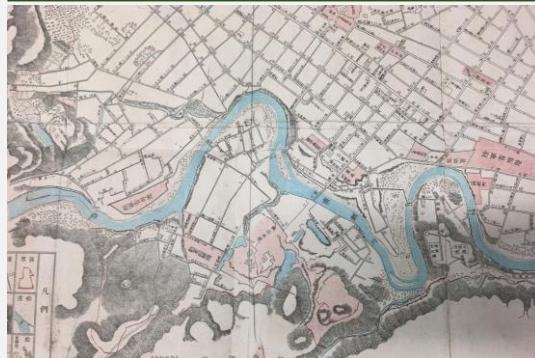
18

軍都・仙台の歩み② ～城下町・仙台から軍都・仙台へ～



19

軍都・仙台の歩み③ ～城下町・仙台から軍都・仙台へ～



20

軍都・仙台の歩み④ ～第二師団の出兵と凱旋～

佐久間左馬太初代師団長

(明治21年5月～明治28年3月)



乃木希典第二代師団長

(明治28年4月～明治29年10月)



21

軍都・仙台の歩み③ 第二師団の出征・明治27年10月～11月



「東北新聞」明治27年10月31日（宮城県図書館蔵）



「東北新聞」明治27年11月2日（宮城県図書館蔵）

22

軍都・仙台の歩み③ ～佐久間第二師団長の錦絵～



日清戦争錦絵 国立国会図書館デジタルコレクション「第二師団長佐久間中将が城府攻撃而占領之図」

23

軍都・仙台の歩み③ ～第二師団の凱旋・明治29年4月～



明治29年4月20日「第二師団凱旋仙台停車場前歓迎の光景」（『征台軍凱旋記念帖』引用）



「東北新聞」明治29年4月23日 第二師団歓迎記事

24



4 地方ジャーナリズムの成立



日清戦争時の地方メディア概観

「奥羽日日新聞」明治27年8月2日附録

「奥羽日日新聞」明治27年8月3日

「東北新聞」明治27年8月3日

日清戦争時の地方ジャーナリズム① ~「東北新聞」桜田孝治郎~

「東北新聞」明治27年10月10日社告

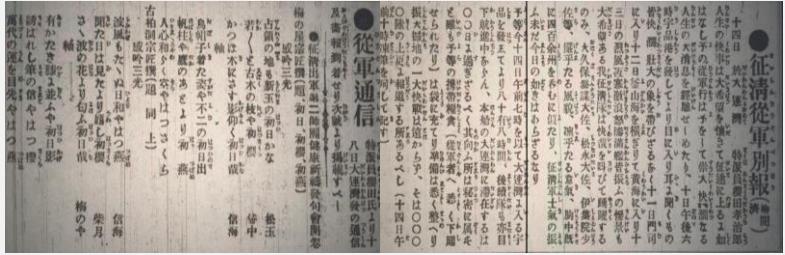
「東北新聞」広告 明治27年8月19日

日清戦争時の地方メディア② ~「東北新聞」の従軍記~

「仙臺人大會」明治27年11月17日「従軍要報」

（明治27年11月17日「従軍要報」）

日清戦争時の地方メディア③～「東北新聞」の従軍記～



(明治28年2月1日「征清從軍別報（検閲済）」)

29

日清戦争の地方ジャーナリズム～「東北新聞」桜田孝治郎の態度～

従軍記者 桜田孝治郎のジャーナリストとしての態度

①国家（大きな物語）から個人（小さな物語）への態度

大本営発表ではなく、個人がどういう思いで戦っているかを重視
“有名性”よりも、“無名性”を重視

②強い郷土意識の態度

東北出身者への強い愛着
地元に戦場のリアリティを伝える態度

⇒地方ジャーナリズムの確立

「東北新聞」明治28年3月20日 従軍の画桜田孝治郎



30

おわりに 日清戦争と日本近代文学



日清戦争と近代文学の黎明



国木田独歩



正岡子規



泉鏡花



森鷗外



樋口一葉

32